

「中央アジアと東アジア 2000 年の歴史」

(仮訳)

フレデリック・スター氏

カザフスタンや他の中央アジア諸国が国際語として採用していること、そして国際的な集まりの場であることから、本日は英語で発言させていただく。

まず、中央アジア諸国が過去四半世紀にかけて達成した偉業に敬意を示したい。同諸国は自国の主権を宣言し、新しい法システムを構築し、議会を作り、私有財産に移行し、経済発展を進めた。これらは驚くべき業績である。

同じく私は日本も賞賛したい。日本はこれらの新しい地域諸国を承認した後、地震・地滑りへの災害救助及び保護を提供することに焦点を当てた唯一の国としてその歩みを進めた。特に重要なことは、日本による中央アジア諸国の若者のための支援であった。彼らは第二次世界大戦後の驚くべき経済成長を実現させた日本の制度や取組みを学ぶことができた。日本はこれら全てを兄としてではなく、一人の友人でありそして対等なパートナーとして行ったのである。

日本と中央アジアの初期の交流は活発であったが、その後日本は一時的に距離を空ける姿勢を装った。しかし2004年、日本は「中央アジア+日本」対話を発表した。これは、個々の国々とだけでなくすべての国のリーダーらと共に様々なレベルにおいて定期的なハイレベル対話を呼びかけるものであった。注目すべきであるのは、この対話が「日本+中央アジア」ではなく、「中央アジア+日本」として認知されていることである。この違いは重要だ。

このようなイニシアティブを掲げるにあたり、日本は、中央アジアを新しい主権国家のグループとしてだけでなく、独自の特徴ある国益・見解・域内関係を持った地域として扱うという道を主導した。中央アジア経済連合が外圧の下瓦解されていったとき、日本はかかる地域主義は適切かつ必要なものと改めて主張し認めた。我々は「分けて統治せよ」というか

のユリアス・シーザーの言葉を耳にしたことがあるが、ここで日本のモットーは「手を取り合って栄えよ」であった。

中央アジア諸国と日本の間には距離があるため、双方がお互いのことを遠く、アクセスしづらい存在と捉えたかもしれない。しかし、そうはならなかったし、それにはもっともな理由がある。中央アジアと日本の交流の歴史は遠い過去に遡る。11世紀には、現在のキルギスに生まれ、現在我々が民族誌学及び比較言語学と呼ぶ分野の世界的草分けであるカシュガルのマフムッドは、テュルク語に関する自身の偉大な著作に日本の地図を載せていた。マフムッドのものが日本を描いた最古の地図なのだ。中央アジアと東アジアの交流を示すもう一つの例を挙げるとすれば、朝鮮人の商人が地方の権力者に献上品を納品している様子を描いた7世紀の壮麗なフレスコ画をサマルカンドで見ることができる。そのフレスコ画が描かれたのと同じときに、日本の聖武天皇は彼の所有する奈良の正倉院の宝物殿に収めるための作品を、当時知られていた全世界から集めていた。聖武天皇が建てた建造物に現存する彼の収集物の中には、中央アジアの極めて貴重な作品も含まれている。

中央アジアと日本の交流は高級品の貿易に留まるものでは決してなかった。日本に早い段階で根付いた仏教は、インドから直接伝わったものではなく、中央アジアとアフガニスタンを経由して伝わった。仏教の経典をアジアの諸言語に翻訳したのは中央アジアの人々であり、中国、日本、朝鮮に仏教の経典をもたらしたのは中央アジアの商人らだった。ちなみに、それらの翻訳者らは、仏教の経典を訳しただけではなく、翻訳すべき経典を選び、それらを慎重に編集し、重要なことは、自らの考えを付け加えることに何の躊躇いもなかったのだ。この仏教の経典伝来の過程が示すように、中央アジアは決して日本との交流において受動的な立ち位置にあったのではない。彼らは、関係を形作り、東アジアに深い影響を及ぼす積極的な勢力だったのだ。

このことは私を重要な真実に導いた。我々は今日シルクロードについて多くのことを耳にする。しかし、本来のシルクロードが中国人ではなく中央アジアの人々によって開かれ運営されていたことをあなたは知っていただろうか。確かに、中国人自身、商品をアフリカと中東に海路で運搬した。しかし陸路においては、彼らは単に商品を国境まで運び、そこからは西洋への運送と販売を取り仕切っていた中央アジアの人々に取り継がれていた。中央アジアの人々は事実、シルクロード沿いのユーラシア大陸貿易を支配し、当時取り引きされていた通貨の多くを発行し管理さえしていた。

中国人が紙を発明したことは有名である。しかし、中央アジア人らは、中国からもたらされた堅い紙を調べ、それが竹と桑の葉で作られていることに愕然とした。中央アジア産の豊富な綿繊維から作れば良いではないかと。そして、今日我々が知る紙は、中央アジアの人々の聡明な再発明に端を発するのだ。

シルクロードを開き運営した人々はソグド人と呼ばれ、彼らは現在のウズベキスタン、タジキスタン、そしてトルクメニスタンに住んでいた。アラブ軍が襲来するまでの数世紀の間、彼らソグド人は中国内部深くの貿易拠点を維持していた。日本へ貿易をもたらしたのも彼らであった。彼らは素晴らしい芸術と文学を生み出した驚くべき人々だった。彼らがムスリムの軍隊に滅ぼされるまで、ソグド人は宗教に関して多様で寛容だった。学者たちは長年、ソグド人が唐時代の中国と日本の奈良時代にどのような影響を受けたかを問うていた。しかし、現在は、ソグド人がいかに東アジアに影響を与えたかが問われ始めている。

もし中央アジアの人々が部分的に唐代の中国の繁栄の要因であったとすれば、それはまた唐の没落の一因でもあった。750年代、安禄山と呼ばれる男が暴動を起こし、繁栄を極めた唐の帝国に終焉をもたらした。安禄山はソグド人の血を半分引いていた。

今から一世紀前、新疆ウイグルの巨大なオアシスの存在が明らかになった際に、日本が中央アジア文明の失われた栄華の再発見において顕著な役割を果たしたことに私たちは注目しよう。

ご存じのように、8世紀のアラブ侵入は、中央アジアの仏教と非アラブ文化の中心を新疆ウイグルの砂漠へと東方へと移動させた。ハンガリー出身の英国人アレル・スタインとその他の探検家らによって、中央アジア史において偉大な瞬間がもたらされた。古代の仏教とウイグルの写本が多数発見されたのだ。

今日、日本人も同様にこの驚くべき発見に関わっていたことを知る人はほとんどいない。日本の皇族のひとりである大谷光瑞（こうずい）伯爵はシルクロードの中心的な探検家のうちの一人で、第一世界大戦の前に新疆ウイグルと中央アジアへ3回探索に赴いた。彼と彼の後継者である橘瑞超（ずいちょう）は多くのウイグルと仏教の古文書を発見し、研究のためそれらを日本に持ち帰った。大谷伯爵はそれらの発見の功績により、ロンドンの王立地理学会の会員に選ばれた。つまり、日本は中央アジア史の忘れられた時代の再発見に積極的に関わった。

この初期の研究によって、今日の日本のリーダーたちが一つの文化地帯としての中央アジアというコンセプトを抱くようになったかどうかは興味深い。というのは、彼らは誰よりも先に、中央アジアを一つの統一体と捉え、その地域的な性格を強調することとなったからだ。

ここ20～30年、日本の研究者はまたアフガニスタンの古代の歴史と文化に関心を抱いている。特に仏教に関する彼らの研究は、ソビエト連邦が中央アジア地域を現在のように2つに分かつ線を引いてしまうまでの2千年に亘り、アフガニスタンが中央アジアの不可欠な部分であったということを認識させた。タリバンによる悲惨な時代を経て、日本はアフガニスタンの緊急事態に際して大規模に支援してきた。しかし、私は最終的にはそれを願っているが、アフガニスタンはまだ「中央アジア+日本」構想の中に含まれていない。

日本と中央アジアの新たな主権国家との関係が最初の四半世紀を迎えたことを記念する本日だからこそ、私は強調したい。つまり、欧州連合も米国も、日本の中央アジアへの地域的アプローチを、自国の同地域との相互関係のモデルに採用したのだ。

2007年、欧州連合は、その地域にとっての重要なパートナーになるべく、初めて中央アジア戦略を採択した。これが持続可能性、教育、人権及び安全保障に関する毎年の高レベル協議に繋がった。日本のモデルに沿った同様の構成体が米国においても提起され、2016年に採用された。

日本型の中央アジアとの相互関係のモデルを採用し得る第三国はインドである。インドの中央アジアへの文化的な関わりは他のいかなる国外勢力よりも遙かに長く深いものである。さらに、科学、芸術、宗教における相互関係は恒常的かつ強烈なものだった。

欧州とアメリカが既に日本の中央アジアとの交流モデルを採用し、最終的にはインドもその仲間入りを果たすかもしれないという事実は、二国間・地域的要素を組み合わせたそのようなモデルが明るい未来をもたらすことを示唆している。それらに共通する特徴は、国家主権とともに、地域内における深い親密性の受容を重視するという点だ。

日本の中央アジアとの関係は、**2015年**、安倍晋三内閣総理大臣が、借款ではなく贈与を、さらには投資と共同事業のための極めて重要な提案を携えて中央アジア5カ国全ての首都を訪れた際に、新たなレベルに到達した。共通の利益・価値を有する一つの地域としての中央アジアというコンセプト

トを掲げながらも、日本はそれぞれの国の特徴を認識し、それに沿って贈与や投資を形作ってきた。

他の主要国のどれも、新たな主権国家を個別に強化することと地域全体として経済・市民生活を強化することとの調和をこれほどとることはできなかったと言っても過言ではない。さらには他のどの国も、開発援助と市場ベースの投資の円満なバランスを保つ事もできなかったのである。

中央アジアにおける日本の行動主義がある種の政治ゲームだと言った者もいれば、日本の真の動機はロシアと中国に対峙するためだと言う者もいるが、私はこれを懐疑的に見ている。日本は常にアジア全体を通して多くの国と友好関係を保ってきた。日本が何故中央アジアにおいて積極的な協力関係を発展させようとするかを説明するよりも、日本がそうすべきでないと主張することの方が、より一層難しいだろう。

中央アジアと日本の双方が関係拡大に実際的な利益を見いだしており、天然資源開発、技術、研究、教育、統治、そして文化といった様々な領域で関係発展を模索している。日本は自国が得るものと同様、あるいはそれ以上に中央アジアの諸国に与えている。単に中央アジアの資源を買い上げるのではなく、資源ベースの経済から脱却し現代の知恵と実践に基礎を置いた多様性のある経済に移行できるように、日本は中央アジア諸国を積極的に支援している。このようなアプローチは誰に対抗するものではない。これは中央アジアのためであり、日本のためでもある。このような関係においては、誰も負けることなく、全ての者が勝つことができるのだ。

25年を経て我々は今どこにいるのだろうか。1991年以降、特に2004年と2015年以降の中央アジアと日本の関係の軌跡を見る限りでは、最高の時期はまだまだこれからである。今日我々が祝福するこの時点が、来る数年後に生まれるより一層重要な関係への単なる玄関口にすぎないとなることも、至極あり得べきことである。

終わりに、中央アジア諸国の政府が日本に対して極めて重要な窓を開いてきたこと、そして、日本政府が個々の国々及び同地域全体の発展をこのように非常に建設的に支援してきたことにも改めて祝意を表したい。あなた方が成し遂げてきたことに深い敬意を表すとともに、より活発で互いに有益な次の四半世紀となることを願っている。